

小学校英語における「子供の伝え合う力」の育成

-CLIL の授業実践-

大阪教育大学大学院連合教職実践研究科

高度教職開発専攻

学籍番号 169975

氏名 梶谷 真希

大学院主指導教員 田中 満公子

小学校英語における「子供の伝え合う力」の育成

-CLIL の授業実践-

学籍番号 169975

氏名 梶谷真希

大学院主指導教員 田中 満公子

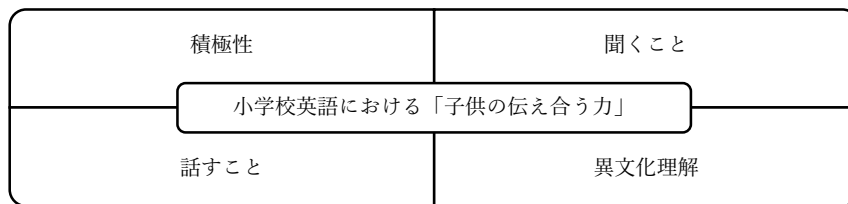
1. 背景と目的

近年、グローバル化の進展や Artificial Intelligence (以下 AI) の進化が飛躍的である。そういった時代において、日本の小学校英語教育でも高学年での英語の教科化や中学年での外国語活動の導入がなされる流れとなっている。従来の小学校英語教育を鑑み、国立教育政策研究所の「平成 28 年度研究成果 小学校英語教育に関する調査研究」や文部科学省の「新学習指導要領『(1) 外国語科導入の趣旨』(平成 29 年公示)」でいくつかの課題が指摘されている。

そこで本研究では、小学校の英語教育の課題の一つである「子供の伝え合う力」を育成することにフォーカスし、研究と実践を行うこととした。

2. 小学校英語における「子供の伝え合う力」と CLIL

先の文献より「子供が自分の思いや考えを伝える段階に至っていない」ことが指摘されたことから、小学校英語教育の課題を「子供の伝え合う力」と定義し、以下の図のように 4 つの要素に分類した。



小学校英語における「子供の伝え合う力」のモデル

これら 4 つの要素を伸ばすために、Content and language integrated learning (以下 CLIL) の指導法を活用した。CLIL とは、山野 (2013) によれば「言語学習と教科内容を統合させ、思考活動、協学、異文化理解を取り入れ、学習者の体験的学習の促進を目的」とする。また、CLIL は第二言語習得理論に則った指導法であり、実習校の目標と筆者の研究課題、そして CLIL で達成される目標が合致することより、本研究で採用した。

3. 実践内容

この2年間の研究では小学校英語における「子供の伝え合う力」の育成を目的としながら、CLILの指導法を軸として授業実践を行ってきた。第1 Semesterでは「実習校の実態把握」、第2 Semesterでは「CLILとNON-CLILの実践と検証」、第3 Semesterでは「『子供の伝え合う力』にフォーカスしたCLILの授業実践」、第4 Semesterでは「第3 Semesterで課題となった『話すこと（応答）』と『異文化理解』の力の伸長を目指した実践」を大きな研究テーマとしながら研究活動を進めた。

CLILの授業内容は、第2 Semesterでは「家庭科の栄養素を用いたヘルシーランチプレート作りと英語での紹介」、第3 Semesterでは「世界の国旗の学習を生かし、コミュニケーションを交えたMy flagづくり」、第4 Semesterでは「オリンピック・パラリンピックの学習を生かしたピクトグラムづくりと英語での伝え合い」である。

4. 検証方法と結果

第2 Semesterでは、授業観察や子供への質問紙調査、教員への質問紙調査・インタビュー等からCLILとNON-CLILのそれぞれのメリットとデメリットを挙げる事ができ、その上でCLILの指導法は「子供の伝え合う力」のみならず、主体的に学ぶことや英語を学ぶこと自体を楽しむこと、教科を横断した深い思考活動ができることなどの教育的メリットがあることがわかった。

この結果を受け、第3 Semesterでは、CLILの授業による「子供の伝え合う力」の育成の効果を図るために、CAN-DO評価や音声クイズ、ワークシートの分析を行った。4件法によるCAN-DO評価では事前と事後で「子供の伝え合う力」の4つの要素のうち、「異文化理解」以外の3つで向上が見られた。特に「聞くこと」に関しては、音声クイズのCLILの内容が理解できていれば解ける問題の正答率は96.9%であった。しかし、授業観察やCAN-DO評価の結果から、伝え合う活動で既習の学習フレーズを活用することや他者の話に応答することに関して課題が見られた。

そこで、第4 Semesterでは、「話すこと（応答）」と「異文化理解」の力の伸長を目指した実践をCAN-DO評価や子供のワークシートで効果の分析を行うとともに、第3 Semesterと同じ音声クイズを実施し、習得状況の確認を行った。結果として、CAN-DO評価の第3 Semesterと同じ「異文化理解」の項目の平均値が上昇した。また、ワークシートでパラリンピックに対する関心や障害者スポーツに対する理解が深まっている記述が見られた。

5. 成果と課題

以上のように多様な方法で子供の伸長を測った結果、小学校英語における「子供の伝え合う力」の育成のためのCLILの授業実践は有効であったと考えられる。また、「子供の伝え合う力」のみならず、外国語を通して、他教科の内容や世界の国のこと、人権について、子供たちの考えを深められたことは、大きな成果であったように思われる。

一方で、限られた実習期間の中での実践で、子供の「異文化理解」の伸長には伸び代を残したため、継続的な指導の必要性が求められると考える。